

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：11201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2014～2016

課題番号：26380664

研究課題名（和文）地域社会における文化資源の活用に関する研究：近代芝居小屋を事例として

研究課題名（英文）Study on utilization of cultural resources in community using case of Shibaigoya

研究代表者

小野澤 章子（Onozawa, Akiko）

岩手大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：30291850

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：明治初期から昭和初期に日本各地に設置され、その当初の目的が芝居（演劇）上演のための劇場と定義される「芝居小屋」について、社会的運用可能な文化資源としての可能性を検討したものである。現在各地に約20館が確認されているが、そのうち地域活性化の重要な資源として利用されている八千代座（熊本県）、内子座（愛媛県）等の事例調査の結果、当該地域の地場産業の展開プロセスと芝居小屋の地域資源化は連動しており、またそれらを進めるために地域内に留まらず地域外の諸主体の参加が重要であることが示された。

研究成果の概要（英文）：This research examined the possibility of a "SHIBAIGOYA" as a socially operable cultural resource. Shibaigoya was the theater to present kabuki, and it was established in many Japanese communities in the early stages of the Showa Period from the Meiji Period. About 20 shibaigoya are currently confirmed, of which case study was conducted on Yachiyo-za in Kumamoto Prefecture, Uchiko-za in Ehime prefecture, and others. Those shibaigoya are used as important resources for regional revitalization. As a result of the investigation, I found that the development process of local industries in the area was linked with the resource utilization of the theater. In addition, it was shown that participation of various members outside the area is important not only within the area but also for promoting activities.

研究分野：地域社会学

キーワード：芝居小屋 地域社会 地域資源 文化資源

1. 研究開始当初の背景

(1) 「文化」の社会性への注目：文化資源

各種の「文化」を社会科学の対象として分析・考察する試みが近年増加している。このようなものの一つに、各種の文化をその社会・時代を示す固有な表象であり資源（文化資源）と見なすアプローチがある。文化資源とは有形・無形の精神的活動の産物で社会的運用可能なものを意味し（伊藤、2008）、井口（2011）によれば、実際の文化資源は、歴史文化資源から生活文化資源に至るまで多種多様であり、ハードウェアのみならずソフトウェア、さらにヒューマンウェアに及ぶものとされる。つまり、カテゴリー化可能な「結果としての文化」のみならず、文化が生み出される空間、それに関わる主体、その時間的展開、これら全体を文化にとらえ、文化を社会にとって有意味な資源と見なす点に特徴があるといえる。

(2) 「芝居小屋」に関するこれまでの知見

このような文化資源の特徴を明確に示すものに「芝居小屋」がある。従来建築学や芸能史研究のなかで取り扱われてきたが、文化資源として現在利用されているものを中心に考えれば、芝居小屋とは「明治初期から昭和初期に日本各地に設置され、その当初の目的が芝居（演劇）上演のための劇場」と定義できる（小野澤・細江、2012）。外観は洋風、和風、その折衷など多様で、内部には棧敷席・花道・回り舞台など江戸期からの芝居小屋の特徴的装置を有している劇場である。現在西日本を中心として各地に約 20 館が確認され、その多くが地域活性化の重要な資源として利用されている。



図 1 八千代座（2016年3月撮影）

最盛期（明治後半から大正期）に全国で数千館があったといわれ、各地で文化的活動の中心となっていたという（徳永、2011）。その後、その多くが姿を消していった。現存する芝居小屋も、ほとんどの場合一定期間芝居などの上演の場として利用されなかった歴史をもっている。また、近代的な文化ホールで上演される主要なコンテンツ（商業演劇や音楽コンサートなど）の上演には不十分な舞台環境であるのは否めず、また建設以来数十年の時間の経過による建物のダメージ（多くが大規模な修復工事を経ているものの）も見られる。

これまでに得られた東北地方を中心とした芝居小屋についての知見（小野澤・細江、2012、小野澤・細江、2013）から、現在も資源として利用されている芝居小屋は、近代化の進展のなかで、都市開発や地域の主要産業の展開・衰退の影響を受けつつ地域の文化資源として存続している。また、それらの事例から得られた芝居小屋のもつ文化資源としてのもっとも重要な特徴は、その文化現象が生起するプロセスの全体性にあることを指摘した。劇場、そこで行われる文化的コンテンツ、そしてそれらに関わる人々、これらが全体として資源となっている。この点は地域におけるさまざまな資源のなかでも、芝居小屋（劇場）という文化資源に特徴的なものと考えられる。

表 1 国重要文化財指定の芝居小屋

	康楽館	(旧)広瀬座	(旧)呉服座	旧金毘羅大芝居(金丸座)	内子座	八千代座
所在地	秋田県小坂町	福島県梁川町 現在は福島市民家園(福島市)に移築	大阪府池田市 現在は明治村(愛知県犬山市)に移築	香川県琴平町	愛媛県内子町	熊本県山鹿市
設立年	1910(明治43)年	1887(明治20)年(推定)	1892(明治25)年(明治初年に設立した戎座を移築)	1835(天保6)年	1916(大正5)年	1910(明治43)年
設立主体	合名会社藤田組	町の有志による	近隣商家の旦那衆による	金刀比羅宮別当金光院	株式会社内子座	劇場組合
建物の特徴	和洋折衷	外観内装とも和風	江戸以来の芝居小屋の伝統を残す	外観内装とも和風	外観内装とも和風	外観内装とも和風
改築等	1985年修復復活	1994年移築復元	1971年移築復元	1976年移築復元	1985年修復	1980年代後半改修 1989年復活公演
定員数	607人		200人(1階)	800人	約500人	約700人
現状の使	演劇、その他	見学中心	見学	歌舞伎(年1回)以外は見学のみ	演劇、その他	演劇、その他
現在地の所在地	小坂町	福島市	財団法人明治村	琴平町	内子町	山鹿市
指定重文	2002年	1998年	1984年	1970年	2015年	1988年



図 2 旧廣瀬座（2016年5月撮影）

2. 研究の目的

以上の背景を踏まえ、本研究では文化現象が地域社会において地域の社会的特徴（特に地場産業など）や地域の人々の文化への関心などが変化するなかでも断絶することなく、有効な資源となって現在に至るプロセスに注目する。その分析を通して、文化資源がもつ地域社会の活性化に対する役割、特に地域内部からの主体的・積極的な活動や新たな価値創出の可能性について、日本各地に現存する芝居小屋を事例として検討することを目的とする。

特に下記の点を研究の焦点とする。

(1)芝居小屋の発展・衰退の要因：芝居小屋の全体をできるだけ理解し、その発展／衰退の要因を理解する。設立の背景についてはその地域の産業的特性を、また衰退の要因としては利用状況を、重要な観点として検討を進める。

(2)地域における文化資源としての芝居小屋の（再）発見プロセス：現存する芝居小屋のほとんどは、利用が中断した歴史をもつ。その後地域における文化資源として発見され利用されるに至るプロセスが、重要なポイントであると考えられる。設立の経緯や地域性などに配慮し選定した事例について、この点を明らかにする。

(3)芝居小屋の再発見による地域社会の変化：多様な主体（所有者、経営責任者、文化活動の担い手、観客など）がどのような関わりをもって文化資源としての芝居小屋の再発見を成し遂げたのか、また地域社会全体に対して与えた影響について、事例から把握する。

3. 研究の方法

(1)各種文献、資料の収集分析

特に以下の課題を明らかにする。

- ・「芝居小屋」の概念整理
- ・基礎的情報の収集

これらについては、主として文化社会学、文化学、文化政策学、地域史等の文献を用いて収集に努めた。

(2)事例の検討

資料分析、現地調査により、特に以下の課題を明らかにする。

- ・当該芝居小屋の設立の経緯
- ・再発見プロセス
- ・所在する地域社会の特徴
- ・現在の状況

これらについては、主に国指定重要文化財である6つの芝居小屋を中心に進めた。

(3)現地調査

以下の芝居小屋について、現地での資料収集、関係者へのヒヤリング調査等を行った。

①国指定重要文化財の芝居小屋

2017年3月現在6館ある重文指定の芝居小屋のうち、下記5館について現地調査を実施した。マルカッコ内は現在の所在地である。

- ・旧金毘羅大芝居（金丸座）（香川県琴平町）
- ・八千代座（熊本県山鹿市）
- ・旧廣瀬座（福島県福島市）
- ・内子座（愛媛県内子町）
- ・旧呉服座（愛知県犬山市）

②その他の芝居小屋

上記に加え、地域資源として積極的な利用が図られている下記2館に対しても調査を実施した。

- ・嘉徳劇場（福岡県飯塚市）[国登録有形文化財]
- ・かしも明治座（岐阜県中津川市）[岐阜県指定重要有形民俗文化財]

4. 研究成果

上記の検討を進めていくなかで、以下の点が明らかになった。

(1)理論的知見

芝居小屋・劇場を文化資源としてとらえるためには、文化的活動を行う場・空間として扱ういわばハード的視点と、その舞台上で展開するコンテンツそのもののソフト的視点の、それぞれの流れの接点を焦点に理解を深めることが重要である。

(2)全国の芝居小屋の把握

全国に約20館現存する芝居小屋について、文献資料を中心とした情報収集を実施した。その結果、芝居小屋を新たな地域資源として利用するために関係する諸団体、個人が取り組んだプロセスの理解が重要であること、またその経過には芝居小屋設立時の目的や地域の主産業などが大きな影響を与えていることが示された。

これらのデータ収集について既に廃館となっている芝居小屋についても試みたが、資



図3 内子座（2016年9月撮影）



図 4 かしも明治座 (2017年3月撮影)

料の散逸などによって十分な情報を集めるのが困難となっており、今後も継続して検討が必要である。

また、かつて芝居小屋として利用され現在放棄状態(未利用)の建築物について、数は多くないが全国に存在していることも判明した。これらの建築物の資源化の可能性も今後の重要な課題である。

(3) 地域資源化の要件

様々な形で地域資源として利用されている芝居小屋の事例は、設立され利用が活発だった時代から、利用が減少もしくは停止の期間を経て、再発見され現在にいたるプロセスを経ている。

これらが可能になる条件について、ひとつは所在する地域の地場産業の社会的経済的状況が指摘できる。現存する芝居小屋の(当初の)所在した地域は、基本的に明治から昭和初期に軽工業等で経済的に豊かな状況であった歴史をもつ。その地域産業の隆盛衰退と芝居小屋のありようも連動するが、産業の衰退後も文化財としての価値は少なくともハードとしては残存することになる。その中で、芝居小屋を再発見し移築復原等に取り組む当該地域社会の関係者たちは、自らの地域がもつ文化資源の特徴やその豊かさを再発見し、それが現在にいたる新たな地域づくりの契機となっている。

このような、芝居小屋の価値に目を向け再発見する人たちの存在がもう一つの条件となることが示唆された。再発見の主体は、多くの場合地域外の人々が重要な役割を担っている。それは演劇・映画関係者や、建築の専門家、またIターン者のような立場の人々である。彼らの目から見た時、ただの廃屋に見える芝居小屋が高い価値をもつ地域資源となる。

その外部からの指摘が、当該地域社会のさまざまな立場の人たちによる地域資源化の動きをサポートし、結果として芝居小屋は再生されていくということが指摘できる。

(4) 今後の方向性

芝居小屋として活用を進める複数の事例を検討したところ、活用の方向性は芝居小屋を文化財として利用するか劇場として利用するか、いわゆる「保存と活用」のバランス

によって異なるパターンをもつことが示唆された。

また、建築物としての芝居小屋の文化財的価値の評価(各公共団体による文化財指定、例えば国の重要文化財指定など)が、その活用の内容に大きな影響を与えていることも指摘できる。文化財としての評価が文化資源の発見、その後の利用に与える影響について、更なる知見の蓄積が望まれる。

<引用文献>

- 井口貢 2011 「公共政策としての文化政策」井口貢編著『地域の自律的蘇生と文化政策の役割』学文社, pp. 8-27.
 伊藤裕夫 2008 「地域文化資源と文化マネジメント」井口貢編著『入門文化政策 地域の文化を創るということ』ミネルヴァ書房, pp. 53-66.
 小野澤章子・細江達郎 2012 「地方都市における近代芝居小屋の盛衰 盛岡市の検討」『岩手フィールドワークモノグラフ』14: 1-17.
 小野澤章子・細江達郎 2013 「明治末から大正期の演劇雑誌にみる盛岡の芝居小屋」『岩手フィールドワークモノグラフ』15: 1-13.
 徳永高志 2011 「劇場をつくる・地域をつむぐ」井口貢編著『地域の自律的蘇生と文化政策の役割』学文社, pp. 53-75.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計1件)

①小野澤章子、文化財としての「芝居小屋」と劇場：香川県琴平町「旧金毘羅大芝居」の事例から、現代行動科学会第32回大会、2015年11月7日、岩手大学(岩手県・盛岡市)

[その他]

学会発表抄録

①小野澤章子、文化財としての「芝居小屋」と劇場：香川県琴平町「旧金毘羅大芝居」の事例から、現代行動科学会誌、32号、2016、56-56

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小野澤 章子 (ONOZAWA, Akiko)
 岩手大学・人文社会科学部・准教授
 研究者番号：30291850

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者 ()

研究者番号：

(4) 研究協力者 ()